ベネッセ教育総合研究所
次世代育成研究室

未妊レポート2013

～子どもを持つことについての調査～

少子化が進行する中、子どものいない男女は、
子どもを持つことや、持つタイミング、子どものいる暮らしをどのように考えているのだろうか。

Contents

◇ 調査の背景、調査概要、基本属性 ……2-3
1. 交際の状況 ……4
2. 結婚について ……5
3. 子どもを持つことについて ……6-7
4. 子どもを持つタイミング ……8
5. 不妊への気がかり ……9
6. 妊娠に向けての取り組み・健康状態 ……10-11
7. 子どもを持つことについての意識 ……12-13
◇ 調査全体を振り返って～専門家からのメッセージ～ ……14-15

おもな調査結果や、ご協力いただいた専門家のメッセージをまとめました。
このレポートは、妊娠・出産・子育て支援に関わるかたがたに参考資料としてお役立ていただけますと幸いです。
また、子どもを持つことを考え始めたかたがたが、パートナーと一緒に手にとっていただけますと幸いです。

調査の背景

現代の日本社会では、晩産化が進行し、第一子出産時の母親の平均年齢は３０歳を超えました（2011年人口動態統計・厚生労働省）。ひとりの女性が生涯に産むとされる子どもの数（合計特殊出生率）も、1.41（2012年）と低い水準にあります。メディアでも「卵子老化」が話題となったり、国からの不妊治療費助成に年齢制限を設けることが決定するなど、晩産化に伴う問題が取り上げられることが多くなりました。

少子化が進む中、これから子どもを持つ可能性のある世代が、どのように子どものいる暮らしを想像し、親になることについて考えているのか、また課題は何なのかを知るために、ベネッセ教育総合研究所では2013年9月に調査を行いました。

調査は、25～45歳の子どものいない未婚・既婚男女約4,100人を対象に行いました。内容は、結婚について（未婚者のみ）、子どもを持つことの意向とその理由、不妊への気がかり、子どものいる暮らしのイメージなど、ライフステージの中で結婚と妊娠に焦点を当てています。

女性については、2007年8月に行った第1回調査との経年変化もみることができます。

調査概要

◇ 調査テーマ　子どものいない男女の子どもを持つことに関する意識、妊娠に向けての行動実態。
◇ 調査方法　インターネット調査

調査・時期	調査地域	調査対象	回収数
第１回 2007年8月	首都圏 愛知、大阪、福岡	子どもがいない、妊娠していない **未婚女性 ／ 既婚女性**	**未婚女性** 500人 **既婚女性** 500人
第２回 2013年9月	首都圏 愛知、大阪、福岡	子どもがいない、妊娠していない **未婚男性 ／ 未婚女性**	**未婚男性** 1,037人 **未婚女性** 1,039人
		子どもがいない、妊娠していない **既婚男性 ／ 既婚女性**	**既婚男性** 1,035人 **既婚女性** 1,048人

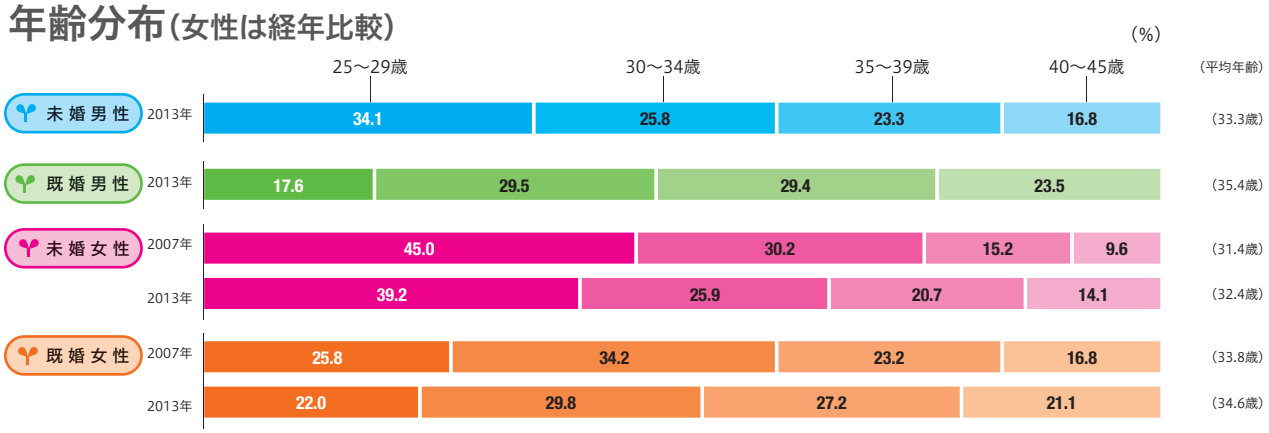
◇ 調査項目
【　共　通　】子どもを持つこと・理由/第1子を持ちたい年齢/不妊の可能性/子どものいる暮らしのイメージ/健康状態・対策/仕事や職場について
【未婚者のみ】交際の状況/結婚について/結婚したい年齢
【既婚者のみ】子どもを持つタイミング・理由/妊娠に向けての取り組み/妊娠・出産・育児支援策への要望/配偶者との関係

◇ 調査協力
竹内　正人（産科医／東峯婦人クリニック）
河合　蘭　（出産ジャーナリスト／『卵子老化の真実』著者）
白井　千晶（早稲田大学非常勤講師／社会学）
竹原　健二（国立成育医療研究センター研究所研究員／疫学）

◇ 図表の数値について　図表で使用している百分率（%）は、小数点第2位を四捨五入して算出しています。四捨五入の結果、数値の和が100.0にならない場合があります。

基本属性

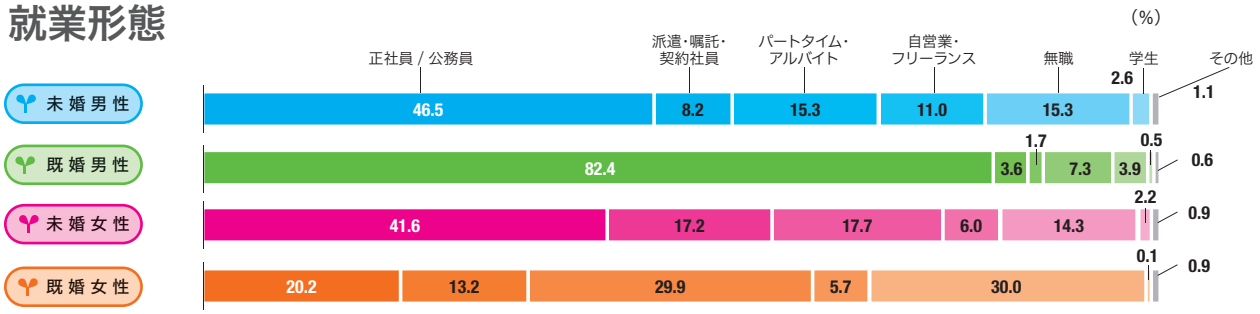
年齢分布（女性は経年比較）



経年で、未婚女性は1.0歳、既婚女性は10ヵ月、平均年齢が上昇。

注1）2007年調査は2005年国勢調査、2013年調査は2010年国勢調査に合わせて、男女別・未既婚別・年齢別・地域別に割り付けして回収。
注2）ただし、2013年調査は、一部が割り付け通りに回収できなかったため、国勢調査の人口割合に合わせて、居住エリア、および年齢区分について重みづけを実施し、経年比較が可能になるようにサンプルの偏りを修正しました。

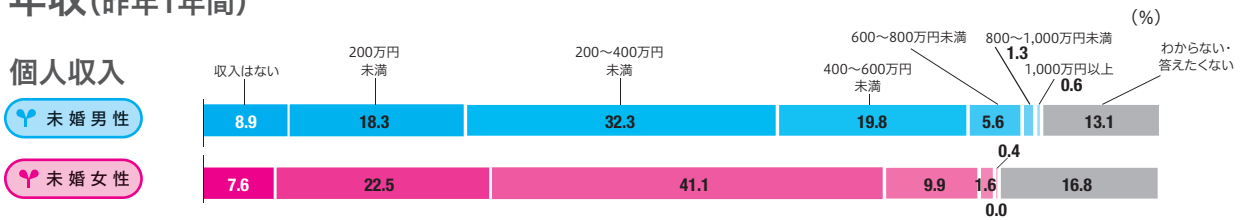
就業形態



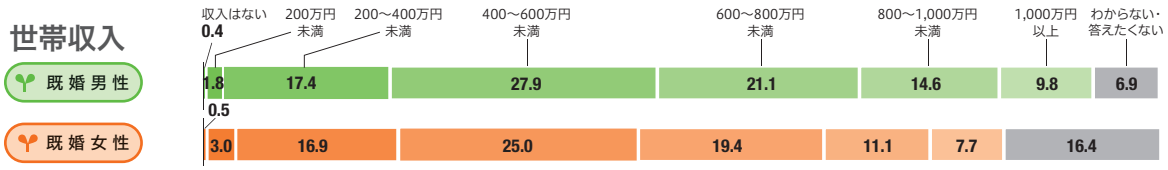
注1）既婚女性は、有職:無職＝7:3で割り付け。
注2）自営業・フリーランスは「自営業・家族従業」「内職・在宅ワーク、フリーランス」の計。

年収（昨年1年間）

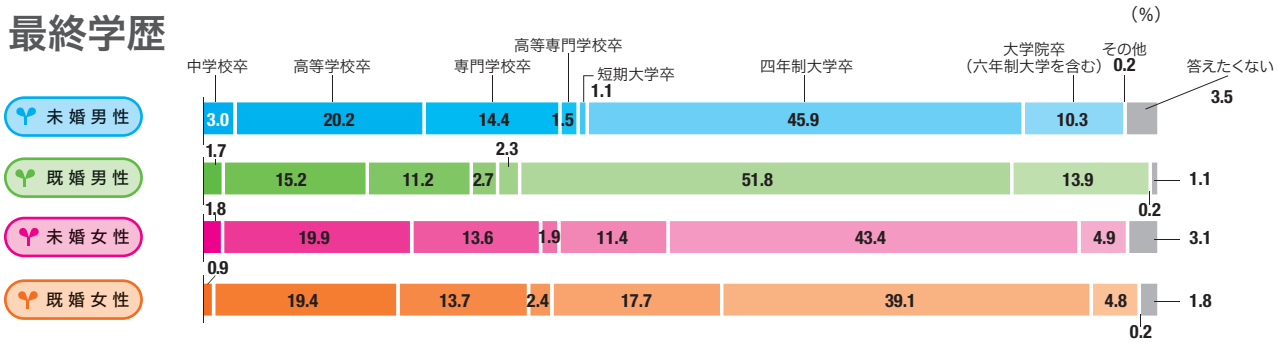
個人収入



世帯収入



最終学歴

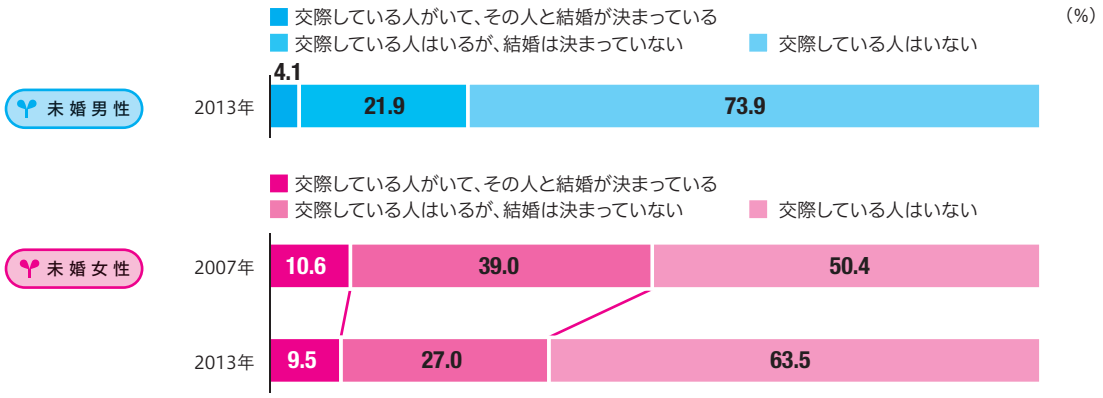


1. 交際の状況（未婚者）

未婚男性の7割、未婚女性の6割は、交際相手がいない。

Q 現在、交際している人はいますか。

図1-1　交際の状況　（未婚男女・女性は経年比較）



男性の73.9%、女性の63.5%は、「交際している人はいない」と回答。女性について、経年でみると、2007年調査より13.1ポイント増加した。

図1-2　交際の状況　（未婚男性・年齢別）

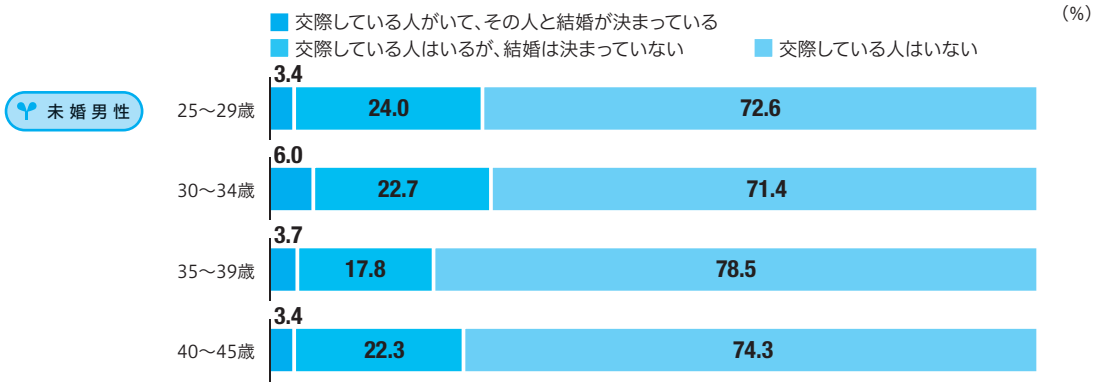
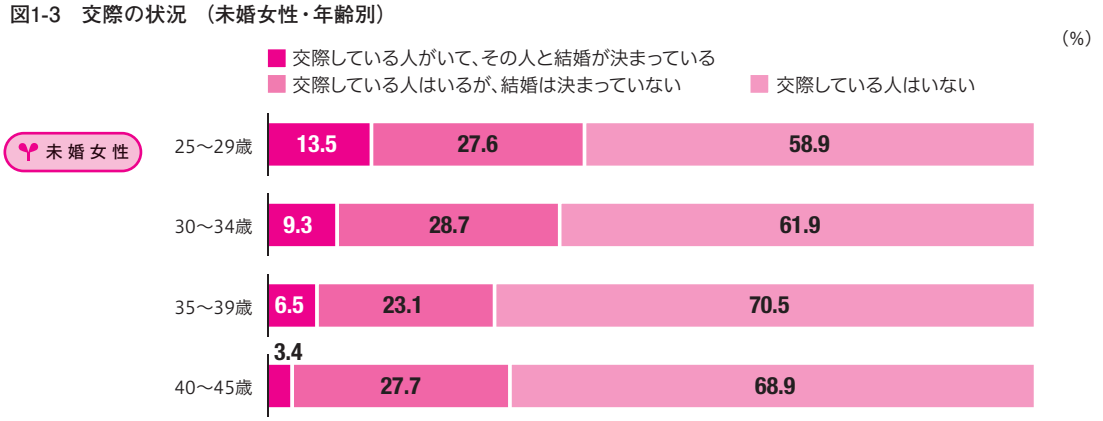


図1-3　交際の状況　（未婚女性・年齢別）

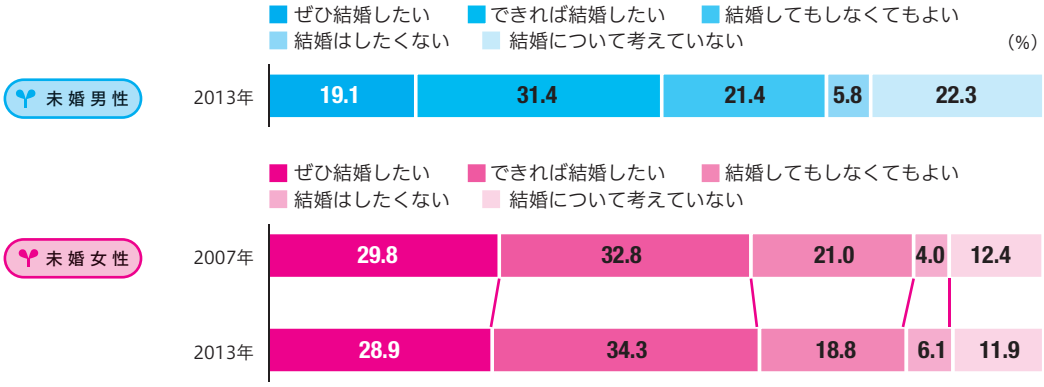


年齢別にみると、男性は、年齢にかかわらず、7割強が「交際している人はいない」と回答。女性は、25～29歳が婚約している割合が高く、交際相手がいない割合がもっとも低い。

未婚男性の5割、未婚女性の6割は「ぜひ結婚したい」「できれば結婚したい」

Q 結婚について、お気持ちにあてはまるものを1つ選択してください。

図2-1　結婚の意向　（未婚男女・女性は経年比較）



結婚への意向について、男性の50.5%、女性の63.2%は「ぜひ結婚したい」「できれば結婚したい」と考えている。女性については、2007年と比べて、結婚の意向に変化はみられない。

図2-2　結婚の意向　（未婚男性・年齢別）

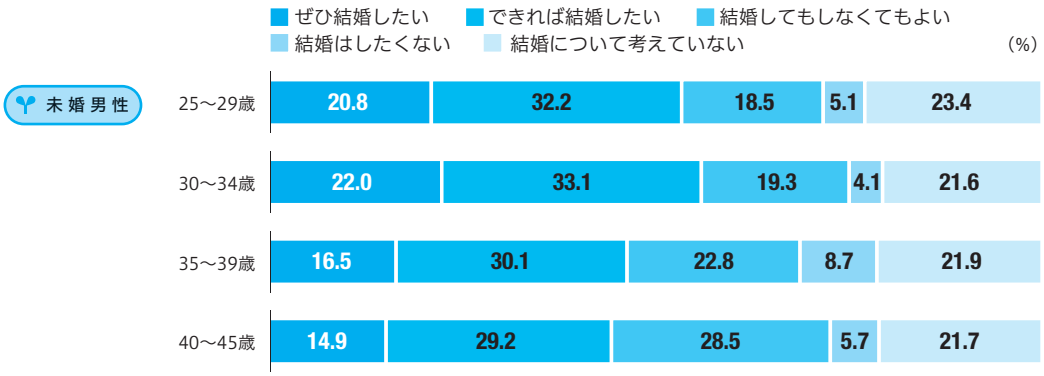
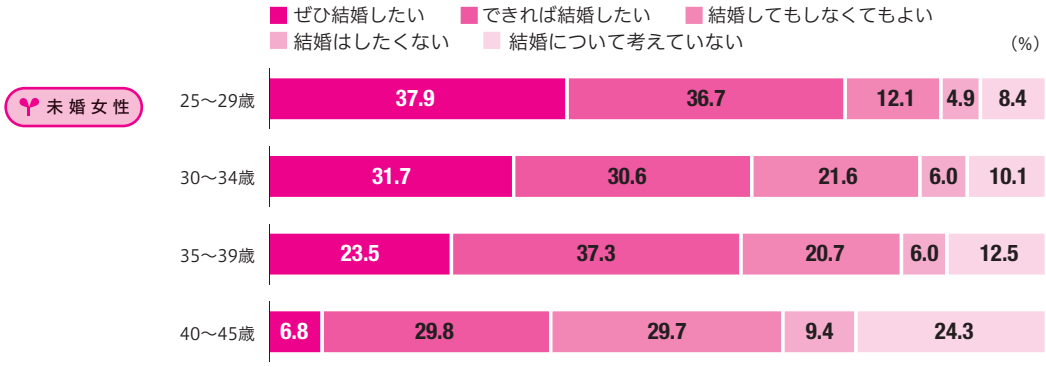


図2-3　結婚の意向　（未婚女性・年齢別）



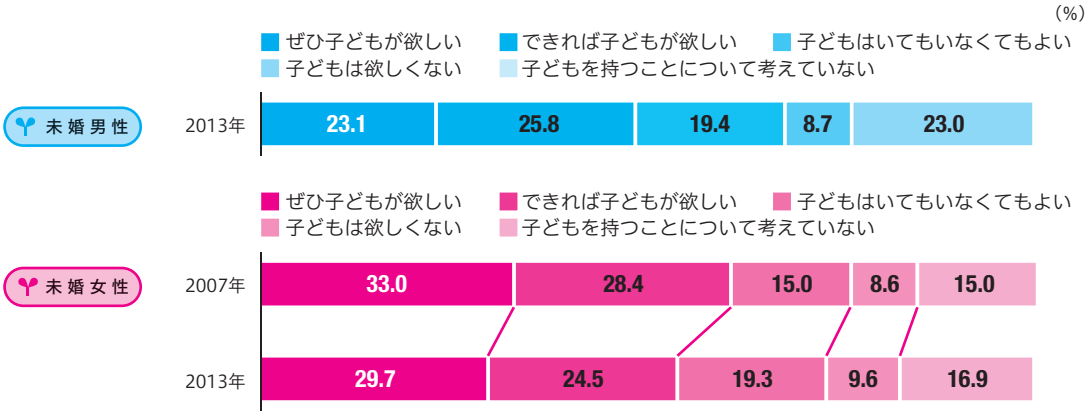
年齢別にみると、男性は年齢にかかわらず、2割は「結婚について考えていない」と回答。女性は、25～29歳の結婚意向がもっとも高く、年齢が上がるに従って減少し、「結婚してもしなくてもよい」「結婚について考えていない」が増加する。

3. 子どもを持つことについて（未婚者）

未婚男性・未婚女性の約5割が、子どもを持ちたいと考えているが、女性は経年で減少傾向。

Q 子どもを持つことについて、お気持ちにあてはまるものを1つ選択してください。

図3-1　子どもを持つこと　（未婚男女・女性は経年比較）



子どもを持つことについて、男性の48.9%、女性の54.2%は「ぜひ子どもが欲しい」「できれば子どもが欲しい」と考えている。女性について経年でみると、2007年と比べて、子どもを持つことへの意向は7.2ポイント減少している。

Q あなたは、子どもについてどのように考えていますか。

表3-1　子どもについての考え　（未婚男女）

未婚男性			未婚女性		
1位	経済的な負担が重くなる	42.9%	1位	経済的な負担が重くなる	46.7%
2位	子どもを持つと自分の自由な時間が制限される	33.6%	2位	仕事との両立が大変である	46.6%
3位	子どもは自分や家族の命を次世代につなぐ	31.1%	3位	子どもを持つと自分の自由な時間が制限される	40.3%
4位	精神的な負担が重くなる	29.1%	4位	身体的な負担が重くなる	38.2%
5位	身体的な負担が重くなる	28.9%	5位	子どもを持つことで自分が成長できる	36.4%

注）13項目中、「あてはまる」の上位5項目。

図3-2　結婚意向と子どもを持つこと　（未婚男性）

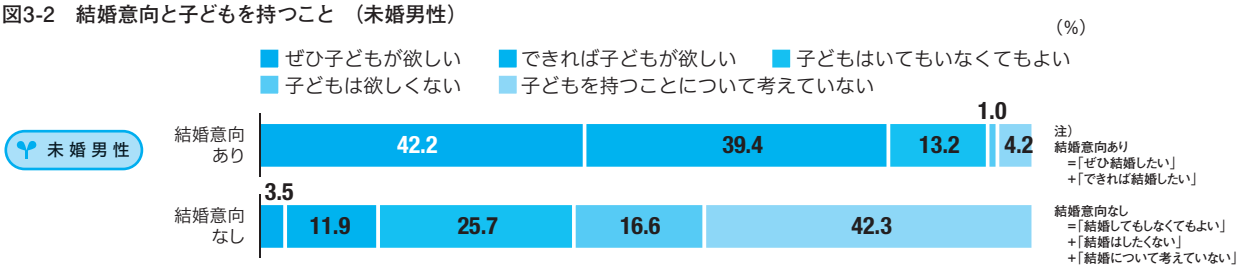
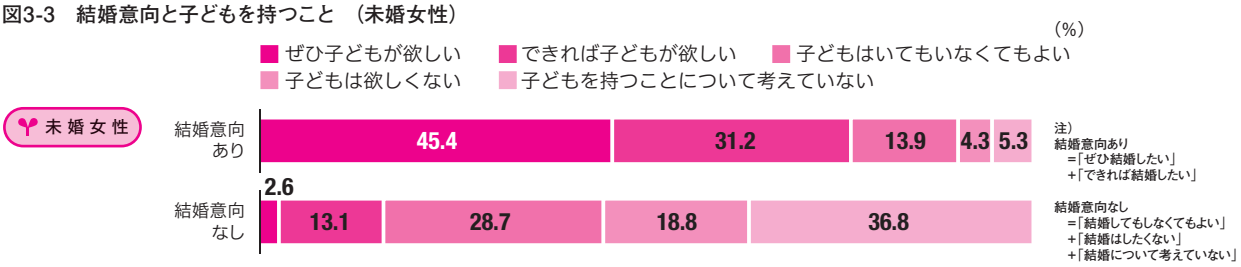


図3-3　結婚意向と子どもを持つこと　（未婚女性）

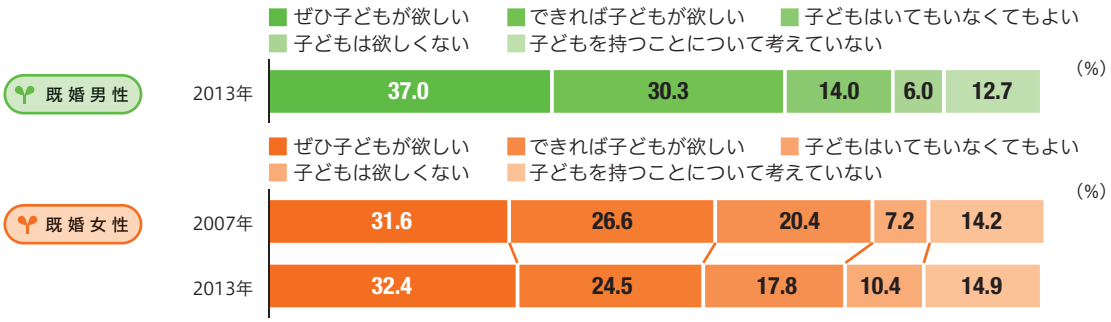


結婚意向と子どもを持つことへの意向の関係をみると、男女ともに結婚意向がある人の方が、「ぜひ子どもが欲しい」「できれば子どもが欲しい」と回答する割合が高い。結婚することと、子どもを持つことには、強い相関がみられる。

既婚男性の67.3%、既婚女性の56.9%は子どもを持ちたいと考えている。女性は経年で子ども意向に変化はない。

Q 子どもを持つことについて、お気持ちにあてはまるものを１つ選択してください。

図3-4　子どもを持つこと　（既婚男女・女性は経年比較）



子どもを持つことについて、男性の67.3%、女性の56.9%は「ぜひ子どもが欲しい」「できれば子どもが欲しい」と考えている。未婚者（図3-1）と比べると、とくに既婚男性の子ども意向が強い。既婚女性については、2007年と比べて、子どもを持ちたい意向に大きな変化はない。

図3-5　子どもを持つこと　（既婚男性・年齢別）

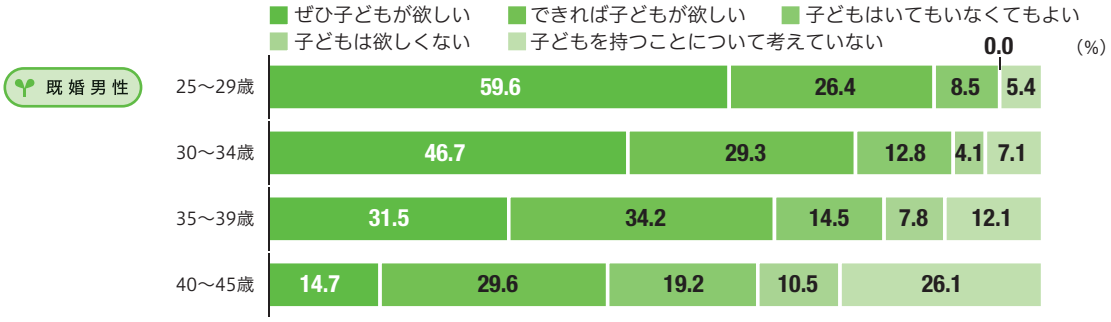
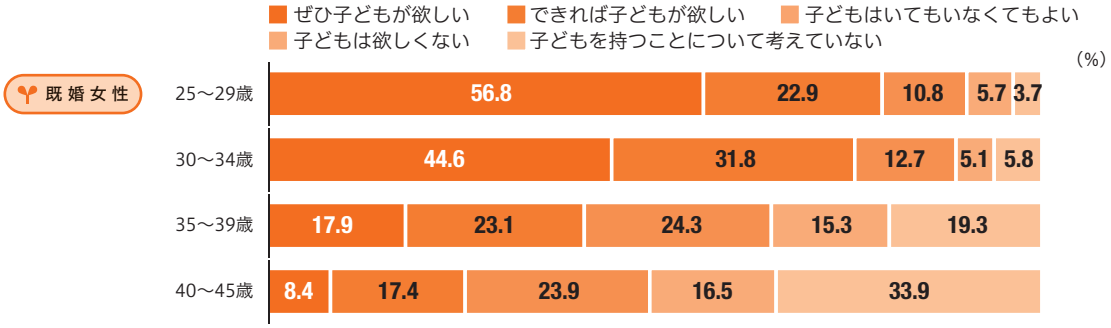


図3-6　子どもを持つこと　（既婚女性・年齢別）



年齢別にみると、「ぜひ子どもが欲しい」は、男女ともに年齢が上がるにつれて減少、「子どもを持つことについて考えていない」は年齢が上がると増えていく。

Q 現在、または将来「子どもが欲しい」と思われる理由として、それぞれお気持ちにあてはまるものを１つ選択してください。

表3-2　子どもを持ちたい理由　（既婚男女）

既婚男性			既婚女性		
1位	自分の子どもが欲しいから	69.4%	1位	自分の子どもが欲しいから	70.6%
2位	好きな人の子どもが欲しいから	53.0%	2位	好きな人の子どもが欲しいから	64.3%
3位	孫を見せて親を喜ばせたいから	42.1%	3位	孫を見せて親を喜ばせたいから	58.5%
4位	配偶者が欲しがっているから	38.9%	4位	自分の年齢的にリミットを感じているから	51.8%
5位	子どもが好きだから	37.7%	5位	子どもを持つことで自分も成長できそうだから	44.2%

注1）「ぜひ子どもが欲しい」「できれば子どもが欲しい」と回答した既婚男女。
注2）19項目中、「あてはまる」の上位5項目。

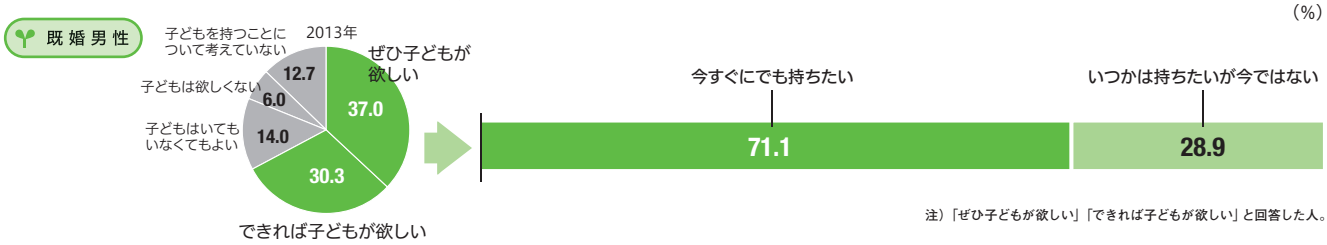
子どもを持ちたいと回答した人の子どもを持ちたい理由の上位３項目は、男女ともに「自分の子どもが欲しいから」「好きな人の子どもが欲しいから」「孫を見せて親を喜ばせたいから」。女性の半数強は、「自分の年齢的にリミットを感じているから」と回答。

4. 子どもを持つタイミング（既婚者）

子どもが欲しい既婚男性の71.1%、既婚女性の74.0%が「今すぐにでも持ちたい」と回答。女性は、経年で13.2ポイント増加。

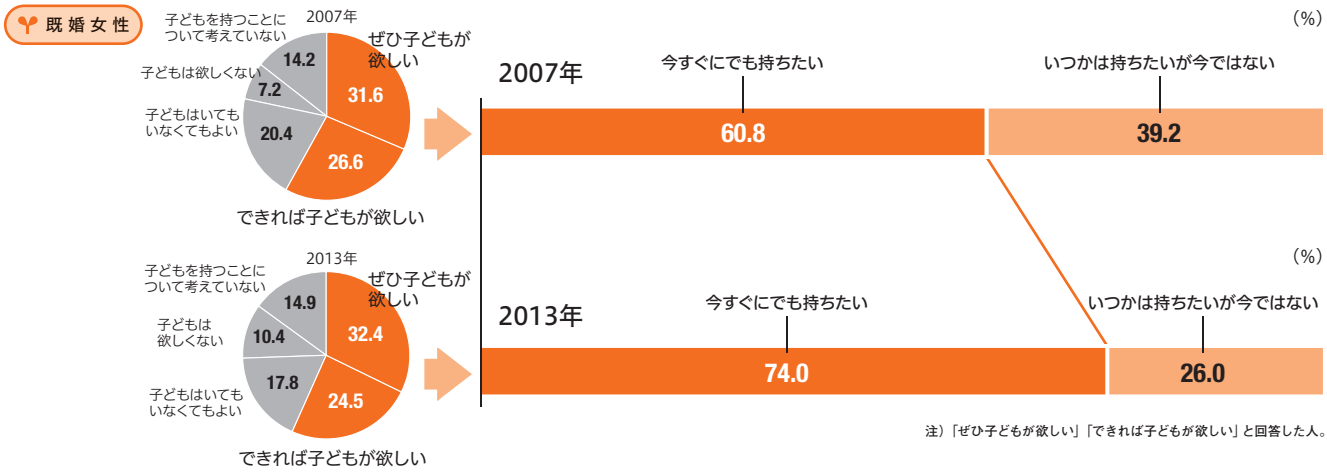
Q 子どもを持つタイミングについて、あてはまるものを選択してください。

図4-1　子どもを持つタイミング　（既婚男性）



注）「ぜひ子どもが欲しい」「できれば子どもが欲しい」と回答した人。

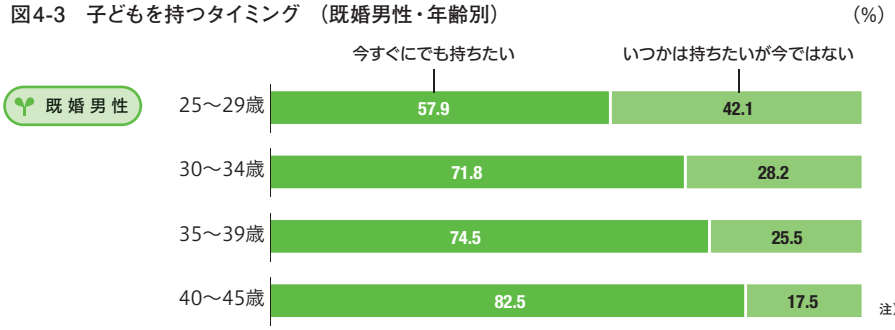
図4-2　子どもを持つタイミング　（既婚女性・経年比較）



注）「ぜひ子どもが欲しい」「できれば子どもが欲しい」と回答した人。

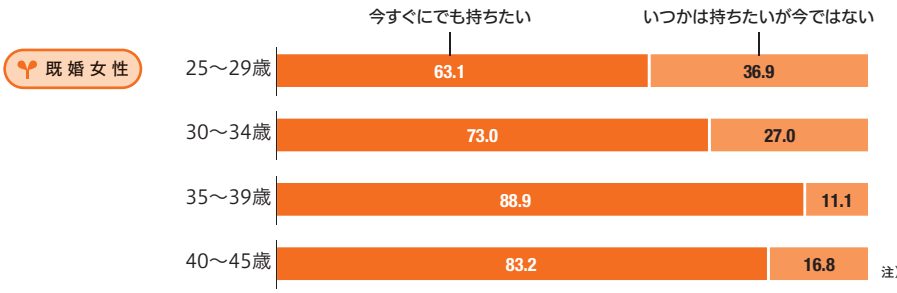
「ぜひ子どもが欲しい」「できれば子どもが欲しい」と回答した既婚男女に子どもを持つタイミングについて聞いたところ、男性の71.1%、女性の74.0%が、「今すぐにでも持ちたい」と回答。女性は、2007年と比べて、「今すぐにでも持ちたい」割合が13.2ポイント増加した。「今すぐにでも持ちたい」のは、既婚男性全体では47.8%、既婚女性全体では42.1%にあたる（図表省略）。

図4-3　子どもを持つタイミング　（既婚男性・年齢別）



注）「ぜひ子どもが欲しい」「できれば子どもが欲しい」と回答した人。

図4-4　子どもを持つタイミング　（既婚女性・年齢別）



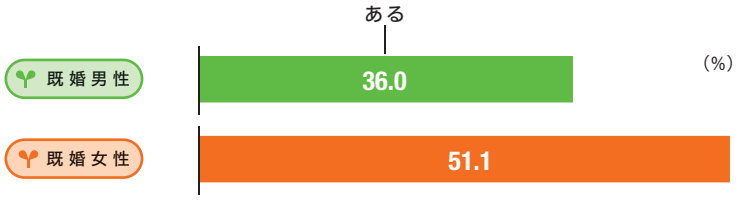
注）「ぜひ子どもが欲しい」「できれば子どもが欲しい」と回答した人。

「今すぐにでも持ちたい」と回答する割合は、男女とも、30代に入ると急増し、男性は40歳以上、女性は35歳以上で8割を超える。

既婚男性の36.0%、既婚女性の51.1%は、自分または配偶者が不妊の可能性があるのではないかと思ったことがある。

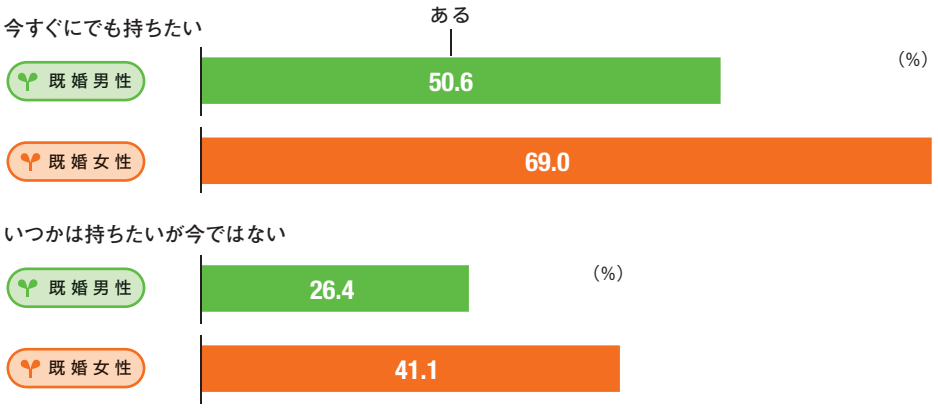
Q 自分または配偶者が「不妊の可能性があるのではないか」と思ったことがありますか。

図5-1　不妊の可能性　（既婚男女）



既婚者全体でみると、男性は36.0%、女性は51.1%が、自分または配偶者の不妊の可能性を感じたことがあると回答。

図5-2　子どもを持ちたいタイミングと不妊の可能性　（既婚男女）

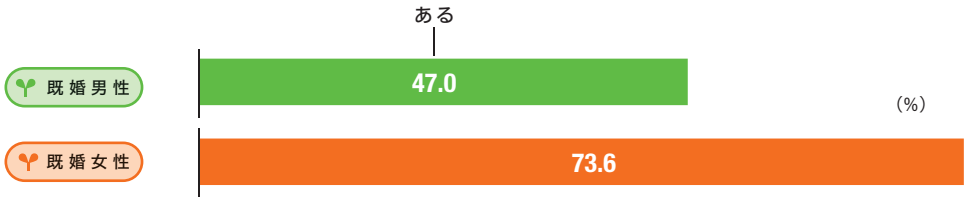


注）「ぜひ子どもが欲しい」「できれば子どもが欲しい」と回答した既婚男女。

子どもを「今すぐにでも持ちたい」男性の半数、女性の約7割が、不妊の可能性があると回答、子どもを「いつかは持ちたいが今ではない」人に比べて、男女ともに高い。

Q あなたは「卵子老化」という言葉を聞いたことがありますか。

図5-3　「卵子老化」という言葉を聞いたことがあるか　（既婚男女）



テレビや新聞などで報道された「卵子老化」という言葉について聞いたところ、既婚男性は47.0%、既婚女性は73.6%が「聞いたことがある」と回答。女性の方が、男性よりも認知度が高い。

調査検討委員会より

不妊への気がかりには男女差がみられますが、不妊の原因の約半分は男性側にあると言われています。知識不足や抵抗感などから、不妊の検査に行かなかったり、治療に協力しない男性もおり、不妊について、男性に向けてのさらなる啓発が必要です。また、男女ともに専門的な治療を受けられる不妊治療施設の増加、男性不妊専門医と産婦人科医の連携が進むことも必要です。

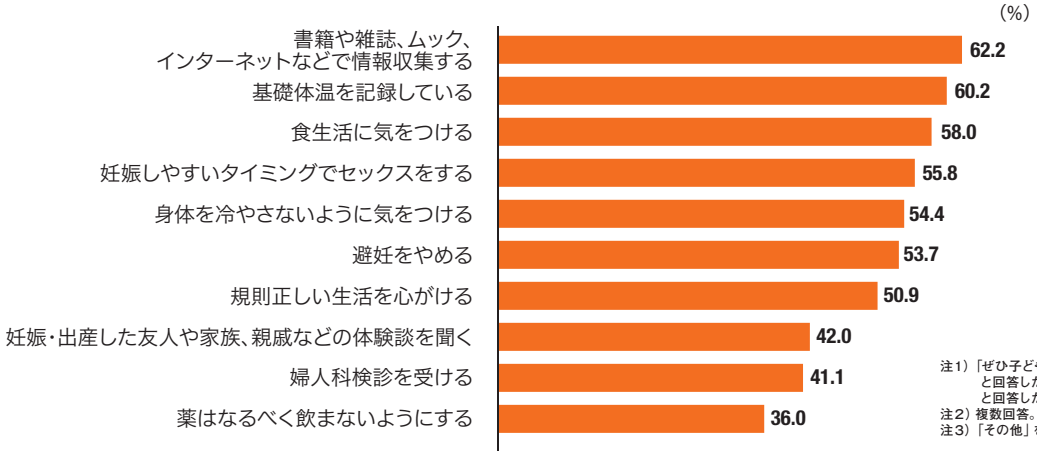
6. 妊娠に向けての取り組み（既婚者）

子どもを今すぐ持ちたい既婚女性は、情報収集や、基礎体温の記録、食生活に気をつけるなど、主体的に妊娠に向けて取り組んでいる。

Q 妊娠に向けて、あなたが現在取り組んでいる／取り組んだことがあることを教えてください。

図6-1　妊娠に向けての取り組み 上位10項目　（既婚女性）

既婚女性



注1）「ぜひ子どもが欲しい」「できれば子どもが欲しい」と回答した既婚女性で、子どもを「今すぐにでも持ちたい」と回答した人。
注2）複数回答。選択した%
注3）「その他」を除く31項目中、上位10項目。

表6-1　妊娠に向けての取り組み 全項目　（既婚女性・経年比較）

(%)

既婚女性		2007年		2013年
妊娠に向けた活動	基礎体温を記録している	58.8		60.2
	妊娠しやすいタイミングでセックスをする	51.4		55.8
	避妊をやめる	51.4		53.7
	排卵検査薬などで排卵の時期・タイミングを知る	32.2		31.3
	セックスの頻度を増やす	19.8		23.7
	その他	14.1		14.8
健康・身体づくり	食生活に気をつける	48.6	<	58.0
	身体を冷やさないように気をつける	37.9	<<	54.4
	規則正しい生活を心がける	40.1	<<	50.9
	婦人科検診を受ける	29.4	<<	41.1
	薬はなるべく飲まないようにする	40.1		36.0
	お酒の量を控える、またはお酒をやめる	18.1	<<	31.1
	現在、体調の悪いところを治療する（婦人科の治療も含む）	31.1		30.4
	予防接種を受けておく（例：風疹・インフルエンザなど）	2.8	<<	26.5
	スポーツ・運動をする	31.1		24.2
	妊娠に効果があるとされる健康食品・栄養補助食品などをとる（例：マカなど）	16.9		24.0
	タバコを控える、または禁煙する	13.6		17.0
	鍼灸や整体、マッサージなどに通う	8.5		10.2
	人間ドックや会社や自治体の健康診断を受けている	10.7		7.3
	漢方療法（例：漢方薬による周期療法など）	8.5		6.8
	アロマテラピー・ホメオパシーを取り入れる	4.0		3.8
	その他	1.1		0.9
情報収集	書籍や雑誌、ムック、インターネットなどで情報収集する	52.5	<	62.2
	妊娠・出産した友人や家族、親戚などの体験談を聞く	42.9		42.0
	妊娠・出産に関するイベントや講習会などに行く	3.4		3.5
	その他	3.4		2.6
仕事と生活のバランス	仕事を辞めた	24.3		27.6
	転職をした	8.5		9.0
	社内で配置転換・異動を願い出て仕事の内容や職責を変えた	1.1		1.8
	その他	2.3		2.6
その他	神社仏閣への参拝・祈願	18.6	<<	31.8
	旅行などで気分転換をする	24.3		27.9
	妊娠によいとされる縁起かつぎ・ジンクスなどをおこなう	15.8		17.7
	妊娠によいとされる温泉（例：子宝温泉）に行く	11.3		8.4
	風水を生活に取り入れる	5.6		6.4
	その他	0.6		1.5

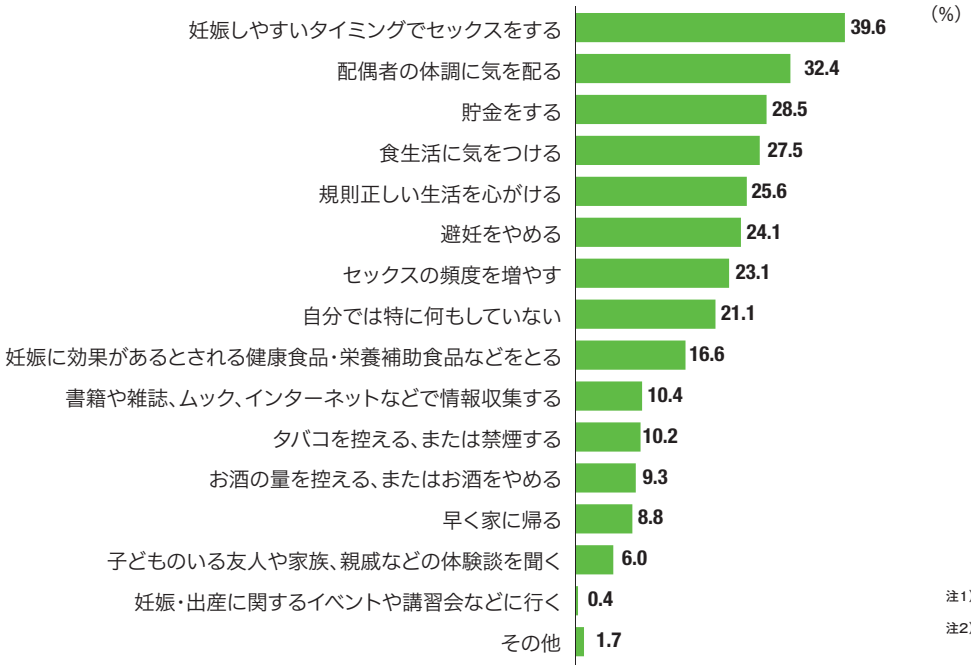
妊娠に向けての取り組みについて、経年でみると、2007年に比べて、全般的に比率が上がった項目が多い。「食生活に気をつける」「身体を冷やさないように気をつける」「規則正しい生活を心がける」「婦人科検診を受ける」「お酒の量を控える、またはお酒をやめる」「予防接種を受けておく」など、健康・身体づくりに関する項目が大きく増えている。「書籍や雑誌、ムック、インターネットなどで情報収集する」「神社仏閣への参拝・祈願」も増えている。

注1）「ぜひ子どもが欲しい」「できれば子どもが欲しい」と回答した既婚女性で、子どもを「今すぐにでも持ちたい」と回答した人。
注2）複数回答。選択した%
注3）増減　5以上10ポイント以下は「<>」、10ポイント以上は「<<　>>」。

子どもを今すぐ持ちたい既婚男性は、配偶者の体調に気を配ったり、貯金などに取り組む。一方、特に何もしていない人も約2割。

Q 子どもを持つことに対して、あなたが現在取り組んでいる／取り組んだことがあることを教えてください。

図6-2　子どもを持つことについての取り組み　（既婚男性）

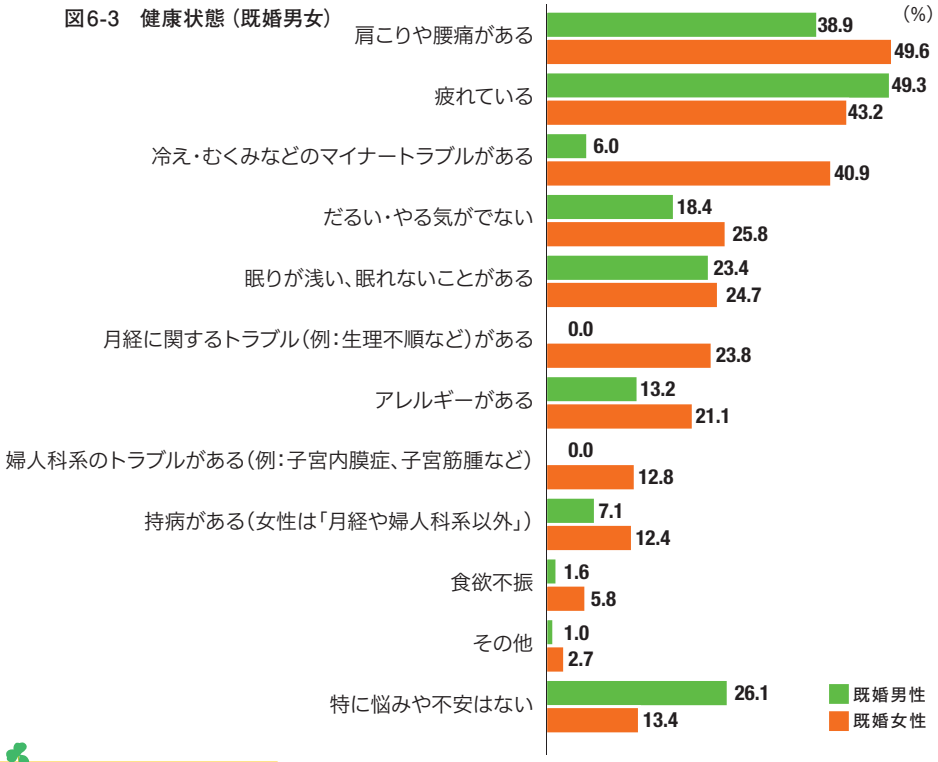


既婚男性は、「妊娠しやすいタイミングでセックスをする」39.6%、「配偶者の体調に気を配る」32.4%、「貯金をする」28.5%が取り組みの上位3位。男性の21.1%は「自分では特に何もしていない」と回答している。「妊娠しやすいタイミングでセックスをする」について、既婚女性では55.8%（図6-1）と、男女で差がみられる。妊娠に向けては、女性の方がより主体的に取り組んでいる様子がうかがわれる。

注1）「ぜひ子どもが欲しい」「できれば」子どもが欲しいと回答した既婚男性で、子どもを「今すぐにでも持ちたい」と回答した人。
注2）複数回答。選択した%

Q 現在のあなたの健康状態に近いものを選択してください。

図6-3　健康状態（既婚男女）



現在の健康状態は、既婚男性49.3%、既婚女性43.2%が「疲れている」と回答。既婚女性の23.8%は「月経に関するトラブル（例：生理不順など）がある」と回答。

注1）複数回答。選択した%
注2）既婚女性の降順で図示。

調査検討委員会より

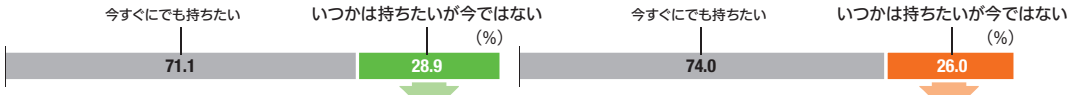
早く子どもを望む女性は、妊娠に向けてさまざまなことに主体的に取り組んでいる様子がうかがわれます。経年では、冷えに気をつけることや、規則正しい生活を心がけること、お酒を控える、予防接種を受ける人が増え、メディアや業界団体による妊産婦向けの情報提供が進んだ影響もうかがわれます。よい傾向ではありますが、取り組みには男女差もみられます。また、半数近い男女が「疲れている」と回答しており、月経や婦人科系のトラブルを持つ女性もみられます。まずは、ベースとなる健康な身体づくりが、健やかな妊娠に向けて大切です。

7. 子どもを持つことについての意識（既婚者）

子ども意向はあるが「いつかは持ちたいが今ではない」と回答した理由は、経済的な事情と、自分や配偶者との時間を楽しみたい。

Q 子どもを「いつかは持ちたいが今ではない」とお答えになった理由として、それぞれお気持ちにあてはまるものを１つ選択してください。

表 7-1　いつかは持ちたいが今ではない理由　（既婚男女）

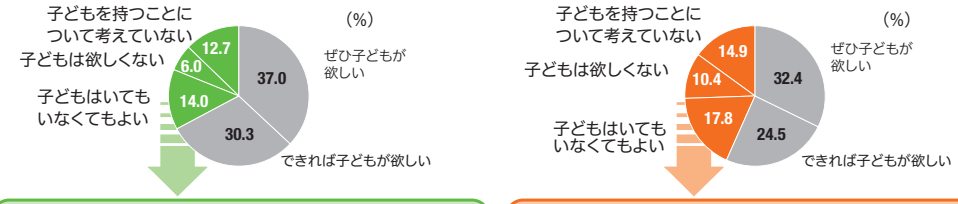


既婚男性			既婚女性		
1位	経済的に余裕がない・貯蓄が足りない	28.9%	1位	配偶者と２人の時間を楽しみたい	36.5%
2位	配偶者と２人の時間を楽しみたい	23.6%	2位	経済的に余裕がない・貯蓄が足りない	32.5%
3位	自分がまだ仕事に集中したい・キャリアを積みたい	19.7%	3位	自分の時間を楽しみたい	26.3%
4位	今の生活レベルを維持したい	18.8%	4位	今の生活レベルを維持したい	24.9%
5位	自分の時間を楽しみたい	16.4%	5位	今の社会環境では、安心して子育てできない	21.8%
6位	今の社会環境では、安心して子育てできない	15.2%	6位	親になる自信がない	20.7%
7位	配偶者がまだ仕事に集中したい・キャリアを積みたい	14.7%	7位	自分がまだ仕事に集中したい・キャリアを積みたい	16.9%
8位	家が狭いなど、居住環境が子育てに不便	9.4%	8位	陣痛・出産時の痛みが不安	15.9%
9位	親になる自信がない	8.0%	9位	自分の職場に子育てしながら働くことへの理解や制度がない	15.6%
10位	配偶者の職場に子育てしながら働くことへの理解や制度がない	7.6%	10位	配偶者がまだ仕事に集中したい・キャリアを積みたい	13.3%
11位	自分の職場に子育てしながら働くことへの理解や制度がない	6.8%	11位	自分の病気の治療中・体調が悪い	12.6%
12位	自分の年齢的に、子どもはまだ先でよい	6.6%	12位	家が狭いなど、居住環境が子育てに不便	12.0%

注1）「ぜひ子どもが欲しい」「できれば子どもが欲しい」と回答した既婚男女のうち、「いつかは持ちたいが今ではない」と回答した人。
注2）20項目中、「あてはまる」の上位12項目。

Q 「子どもはいてもいなくてもよい」「子どもは欲しくない」「子どもを持つことについて考えていない」と思われた理由について、それぞれお気持ちにあてはまるものを選択してください。

表 7-2　子どもを持たない理由　（既婚男女）



既婚男性			既婚女性		
1位	今の生活レベルを維持したい	30.8%	1位	子育ては大変そう	48.2%
2位	自分の時間を大切にしたい	28.6%	2位	自分の時間を大切にしたい	39.0%
3位	子育ては大変そう	27.6%	3位	今の生活レベルを維持したい	32.7%
4位	経済的に余裕がない	26.5%	4位	親になる自信がない	32.5%
5位	今の社会環境では、安心して子育てできない	25.4%	5位	今の社会環境では、安心して子育てできない	31.2%
6位	夫婦２人で生きていきたい	25.2%	6位	経済的に余裕がない	27.6%
7位	配偶者が年齢的に子どもを持つことが難しい	20.7%	7位	自分が年齢的に子どもを持つことが難しい	26.8%
8位	子どもが好きではない	15.6%	8位	夫婦２人で生きていきたい	25.6%
9位	子どもができなかった	13.7%	9位	子どもが好きではない	22.9%
10位	自分が年齢的に子どもを持つことが難しい	12.6%	10位	自分の健康や体力に問題がある	20.4%
11位	配偶者が子どもを欲しがらない	12.1%	11位	子どもができなかった	15.3%
12位	親になる自信がない	10.5%	12位	配偶者が年齢的に子どもを持つことが難しい	14.5%

注1）「子どもはいてもいなくてもよい」「子どもは欲しくない」「子どもを持つことについて考えていない」と回答した既婚男女。
注2）18項目中、「あてはまる」の上位12項目。

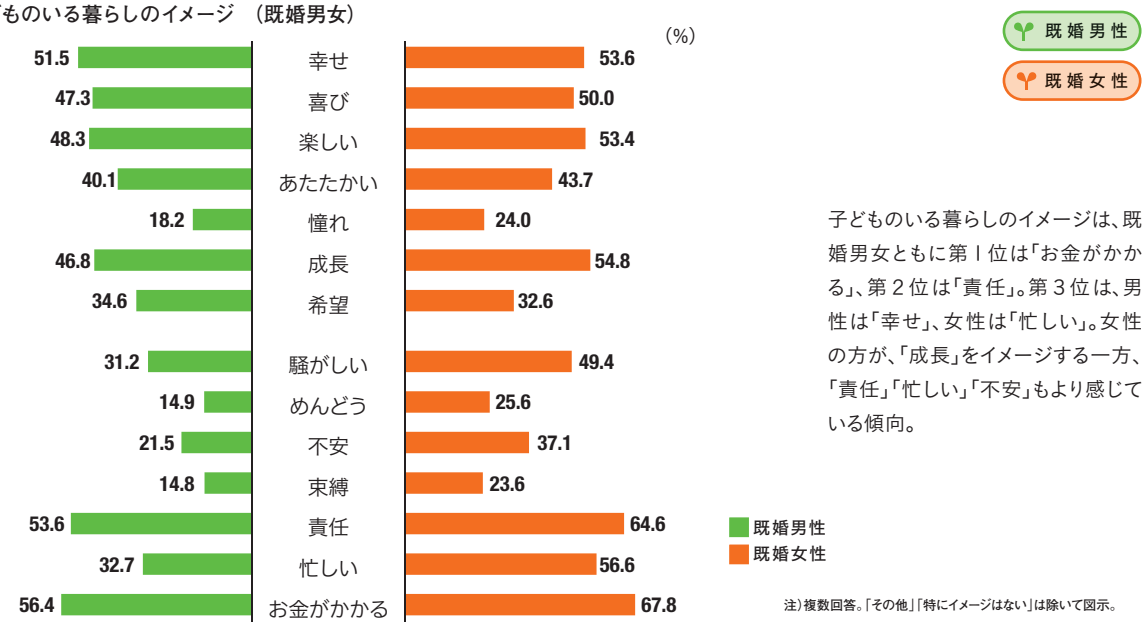
「子どもはいてもいなくてもよい」「子どもは欲しくない」「子どもを持つことについて考えていない」のいずれかに回答した理由として、男女とも上位３位には「子育ては大変そう」「自分の時間を大切にしたい」「今の生活レベルを維持したい」という回答があがった。約半数の女性が子育ては大変そうと感じている。「親になる自信がない」も女性の方が高い。「子どもを持つことについて考えていない」と回答した女性の理由について詳しくみると、自分や配偶者の年齢的な難しさ、自分の健康面、「子どもができなかった」という回答が、「子どもはいてもいなくてもよい」「子どもは欲しくない」と回答した人に比べて多かった（図表省略）。

7. 子どもを持つことについての意識（既婚者）

子どものいる暮らしのイメージ第１位は、男女ともに「お金がかかる」。育児支援策への期待も、妊娠・出産・育児費用の補助など、経済的な支援が上位。

Q 子どものいる暮らしについて、あなたのイメージに近いものをいくつでも選択してください。

図 7-1　子どものいる暮らしのイメージ　（既婚男女）

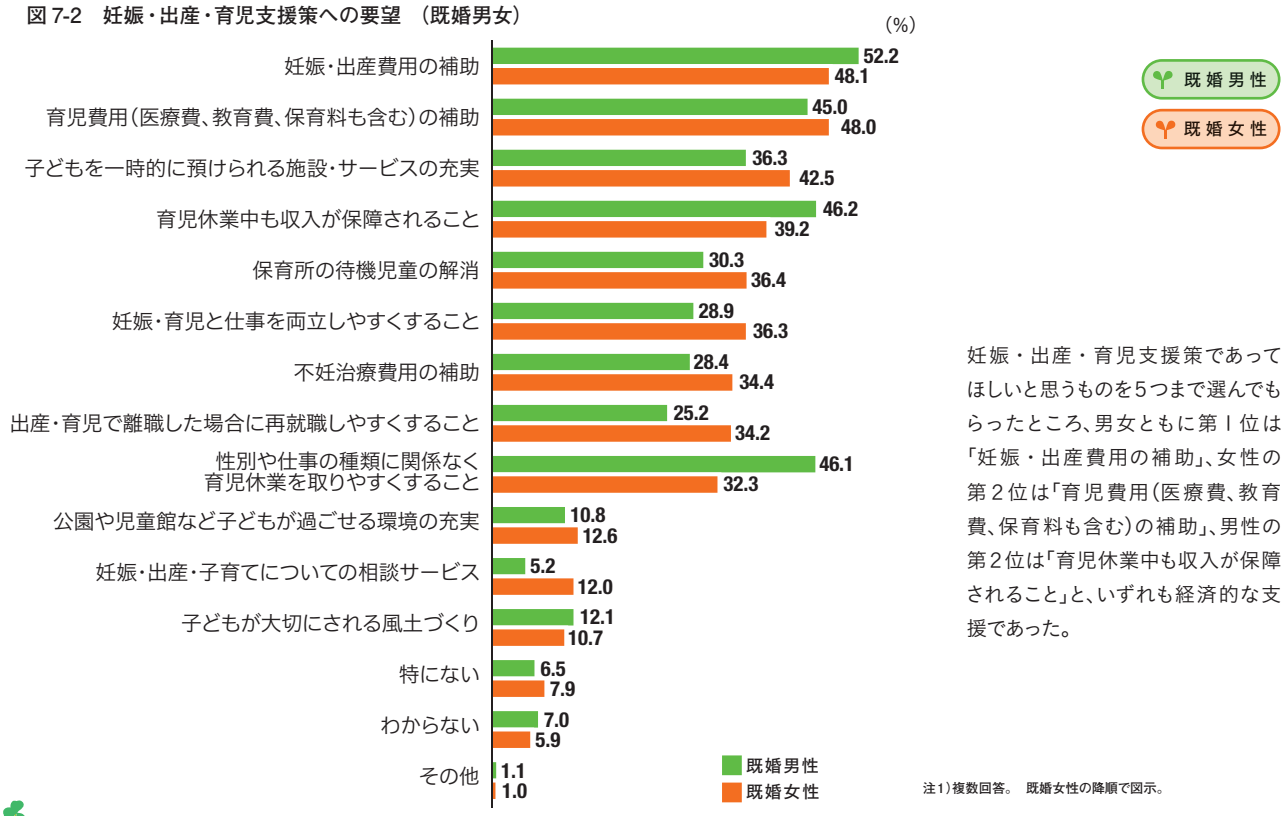


注）複数回答。「その他」「特にイメージはない」は除いて図示。

子どものいる暮らしのイメージは、既婚男女ともに第１位は「お金がかかる」、第２位は「責任」。第３位は、男性は「幸せ」、女性は「忙しい」。女性の方が、「成長」をイメージする一方、「責任」「忙しい」「不安」もより感じている傾向。

Q 妊娠・出産・子育てを支援する施策として、あってほしいと思うものを５つまで選択してください。

図 7-2　妊娠・出産・育児支援策への要望　（既婚男女）



注１）複数回答。　既婚女性の降順で図示。

妊娠・出産・育児支援策であってほしいと思うものを５つまで選んでもらったところ、男女ともに第１位は「妊娠・出産費用の補助」、女性の第２位は「育児費用（医療費、教育費、保育料も含む）の補助」、男性の第２位は「育児休業中も収入が保障されること」と、いずれも経済的な支援であった。

調査検討委員会より

子どもを持つことを先延ばしにする理由や持たない理由、子どものいる暮らしのイメージを聞くと、既婚女性は、子どもを持つことについて、喜びや成長を感じながらも、不安感や負担感、責任感をより強く感じていることがうかがわれます。女性の方が、親になることによる自身の生活やキャリアへの影響が大きいため、楽観的に考えにくいのかもしれません。また、男女ともに「お金がかかる」と回答した割合が高く、育児支援策についても経済に関する要望の割合が高くなっています。経済的な不安で子どもをためらっている人に対しては、育児支援策の情報を分かりやすく届けることで、不安を軽減させることができるかもしれません。しかし、それだけでなく、子どもがいる暮らしのポジティブな面を知る機会を増やしていくことも大切です。

調査全体を振り返って　～専門家からのメッセージ～

調査全体を振り返って

竹内　正人

2007年の第1回調査時に、「晩産化の背景には、生物としての“適妊期”と、社会的に子どもを産める時期の乖離がある」と講評した。晩婚・晩産・少子はこの6年でさらに進み、それを補完するように日本の不妊治療は隆盛を極め、体外受精や顕微授精など高度生殖医療で生まれる子どもが年間3万人を超える時代となった。

■出産予備世代は疲れている

今回の調査結果で最も危惧しているのは、子どものいない既婚男性・女性のそれぞれ49.3%、43.2%と半数近くが「疲れている」と回答した健康状態である（図6-3）。また月経異常が23.8%にあり、婦人科系のトラブルがある女性も1割強いる。さらに、未婚女性では、56.7%に疲れ（未婚男性は48.3%）があると回答。(注1)肩こり・腰痛、冷え・むくみ、月経に関するトラブル、全ての項目で既婚女性より高い結果であった。

■自分事化できない男たち

前回調査で男性のことを、交際・結婚・妊娠においての決断力のなさから「煮え切らない男たち」と評した。女性の生殖高齢化は進んでいるが、「5.不妊への気がかり」でも、そのリアリティを意識できていない男性は多い。交際も、女性は25~29歳では婚約相手、交際相手がいない割合は低いが、男性は年齢に関係なく、7割に交際相手がいない。交際相手がいない女性が13%増えたのも、適切な未婚男性が少ない理由が大きいのだろう。

それでも未婚男性の5割（未婚女性は6割）は結婚したい、同様に5割（未婚女性も5割）が子どもを持ちたいと回答、一方、既婚男性で子どもを持ちたいと回答したのは67.3%（既婚女性は56.9%）であった。男性の「結婚したい」意識は、やはり女性より、「子どもを持ちたい」と連動していた。

■主体的な取り組みへの関心

晩婚化の影響が大きいのだろう。子どもを今すぐに望む既婚男女は増えている。そんな中で、「冷やさない」「規則正しい生活を心がける」などの健康づくりや情報収集など、特に女性で妊娠に向けての主体的な取り組みへの関心が高まっていることは好ましい兆しである。

■生き方の多様からゆりもどしへ

「卵子老化」が話題になったのは、晩産化が抜き差しならない状況ということである。そんな風潮に、テクノロジー（文明）は、卵子・卵巣凍結、デザイナーベビー、新型出生前検査、代理出産…と、自然の摂理にチャレンジするかのように、即物的な暴走を始めている。これは、本質的な解決につながらない。

仕事、結婚、出産のあり方は個々の生き方でもある。ただし、産むのであれば早く（できれば20代、35歳前）に変わりない。漫然と決断が先延ばしされ、生殖のデッドラインを意識して選択せざるを得ない現状が閉塞を生んでいる。今回の調査結果、生殖の事実などが、できるだけ早く（できれば中・高校生のうちに）伝えられ、各自が、自分にとって何が大切なのかという、それぞれの生き方のイメージを持てることから多様は生まれる。晩婚・晩産・少子にも、ゆりもどしが起こることを切に望んでいる。

「今すぐ産みたい」という声を大切にしてほしい

河合　蘭

2007年の第1回調査の頃、私は著書『未妊「産む」と決められない』の取材中だった。当時、よく出会ったのは「あともう少し今の私でいたい」というモラトリアム気分である。あの頃に比べ、今は産んでいない人の理由がぐっと現実的になった。

まず、国勢調査に合わせて割り付けたという回答者の全体像に、出産年齢層の高齢化をひしひしと感じた。未婚者で3割強、既婚者は何と5割がいわゆる「高齢出産」エイジに当たる35歳以上。日本のまだ産んでいない人たちの中で、若い人の割合が減っている。

加えて、未婚者のうち交際相手のいない人が男性では全体の7割、女性では6割と非常に高い数字になった。「日本は多様な結婚や婚外子を認めないので少子化が進む」という議論があるが、パートナーがいなければ同棲もない。「子どもを持ちたいか」という質問も、今回は、その実現可能性を考えながら回答した人が多かったのではないか。

一方で「卵子老化」などの言葉が知られ、子どもを「今すぐにでも持ちたい」と思う人が増えたという集計結果は、加齢による不妊を長く追ってきた者としては感慨深くかみしめた。仕事に精を出すタイプの女性は「産まなくては、と強く背中を押してくれるものは年齢リミットしかない」と言うかたが多いが、都市部でそのリミットが最近４０歳になりかけていたので、それを医学的に妥当な３５歳に戻していくことが必要だ。また精子も老化する。こうした生殖の知識が「衝撃」などではなくなり、当たり前の健康知識に落とし込まれていく仕組みが欲しい。

「今すぐ」と思う人が増えたのはとてもよかったが、それは状況が本当に厳しいからでもある。さらに、産みたいのに産めない人が相当数出るであろうことも確実で、この現実は非常に重い。雑誌で未妊層に向けた特集をする際、子どもを持たない人生をシングルで、もしくは夫婦２人で豊かに生きていくという話題も入ると熱い共感が寄せられるという。

年齢を問わず皆がネックと感じている「お金」の不足感についても真剣に考えたい。日本には「子どもは金銭には変えられないものだ」と、お金の不安を安易に非難する精神論があるのが残念だ。内閣府の調査でも、経済的支援を望む声は高い。加えて、厚生労働省の国民生活基礎調査を見ると、今、世帯年収は平成初期のピーク時から約100万円も下がっている。中でも子どもがいる世帯は生活が「苦しい」「やや苦しい」と感じている割合が平均より高く、7割に迫る。日本は子どもがいると生活が苦しくなる国なのだ。

経済的負担で圧倒的に大きいのは、メディアがよく報じてきた乳幼児医療や妊婦健診の負担ではなく、育児の後半にのしかかってくる高等教育の費用である。日本の高等教育の私費負担は対GDP比でOECD諸国中、最高クラスとなっているが、これについて国もメディアも無関心なのは本当に不思議だ。

子どもは社会のエネルギー源である。この「今すぐ」という気持ちの高まりを、しっかりと受けとめたいものだ。

注1）未婚女性の調査結果はベネッセ教育総合研究所のウェブサイトより、「補足資料集」をご覧ください。　http://berd.benesse.jp/jisedai/research/detail1.php?id=3681

子育て情報や子育てイメージを身近に

白井　千晶

子どもを持っている人に、育児不安感、育児負担感、子育てイメージをたずねた調査は、国の調査を含め複数ありますが、大規模調査で子どもを持っていない人に子育てイメージをたずねた調査はほとんどありません。この「未妊レポート2013」は多くの示唆を与えてくれると思います。調査結果から、結婚している人もしていない人も、子どもが欲しいと思っている人が多いということと、一方で、子どもを持っていない人の子育てに対する負担感やネガティブイメージが無視できない大きさであることがわかりました。

■経済的負担

子どもがいる暮らしのイメージ、子どもを先延ばしにする理由や持たない理由では、いずれも経済的要因が上位を占めていました。日本は、子育て費用の公費負担割合が小さい国です。国内総生産（GDP）の何パーセントが家族関係社会支出にあてられているかをみると、フランス、イギリス、スウェーデンは3％強であるのに対し、日本は1％前後しかありません。同じくGDPに比して国地方政府が学校教育に何パーセント公財政を支出したかをみても、フランス、イギリス、スウェーデン、アメリカは5％強であるのに対し、日本は3％しかありません。日本は教育費が高いのに、それが公共費でまかなわれる割合が低く、私費（家庭支出）に依存しています。このような現代日本で、子どもを持ったときの経済的負担に身構えてしまうのは、当然のことと言えるでしょう。景気や構造的経済的格差だけのせいではありません。まず私たちにできることは公私・官民の子育て支援について、子どもを持つ前から知っておくことだと思います。

■子育てイメージ

「未妊レポート2013」は、有配偶者・無配偶者／男女／量的・質的調査を行った総合的で大規模な調査です。そこから分かったのは、子育てイメージ、特にネガティブな子育てイメージが、子どもの年長期の不安や責任（教育費、子どもが育つ環境、道徳教育等）に偏重していることでした（待機児童問題など低年齢期のことも皆無ではありませんが）。その偏重は、教育費負担が年長時にかかってくることから考えれば当然のことですが、もう一点、小さな子どもがいる生活の体験機会が少なく、自らが子どもだった経験を思い返すしか子育てイメージを持ちにくいためではないかと思います。「家庭教育についての国際比較調査」（2005年、座長牧野カツコ）では、日本は親になる前の経験・学習機会が乏しく、小さな子どもの世話をすることや、学校等での準備学習がほとんどないまま、何の経験もなく親になる割合が高いことがわかりました。学生時代のシッター経験、街で子どもにふれる機会、自身のきょうだいや友だちが子どもを持つなど、身近に子どもや子育てを感じる経験などが少なければ、子育ての醍醐味をリアルにイメージできないのは当然でしょう。子育てが社会の中でタコツボ化しないこと、これがカギのひとつだと思います。「少子化対策」のためでなく、「もっと早く子どもがいる生活の幸せに気づきたかった」という先輩方からの助言です。

子どもを持つことの「大変さ」

竹原　健二

「経済的な負担が増す。自分の時間が拘束される。精神的な負担が増す。そして、身体的な負担までもがのしかかる」
文字にすると、このような大変そうなことを誰が望んでするのか、とさえ感じてしまう。今回の調査で、未婚男性が「子どもを持つこと」に対するイメージを回答し、その上位5項目のうち4項目を、こうした負担・拘束といった項目が占めた。なぜ子どもを持つことが、こんなにも「負担」ととらえられてしまうのだろうか。上司や同僚、友人などを見たり、話を聞いたりしていく中で、未婚男性がそう感じてしまっているのだろうか。もしそうなのだとしたら、一人の父親としてこんなに残念なことはない。

たしかに、今回の調査では、子どもがいない既婚男性が健康状態を問われ、「疲れている…49.3％」、「肩こりや腰痛がある…38.9％」、「眠りが浅い、眠れないことがある…23.4％」、と回答していた。この心身の不調が、どれくらい深刻な状態であるかについては、この調査結果からは分からない。ただ、「オレは身体的に（精神的に）ヘトヘトなんです。大変なんです。」と訴える声を上げる男性がいた、とは言える。もし、これらのヘトヘトな既婚男性が、未婚男性同様に、子どもを持つことを「負担」と感じていたとしよう。子どもを持つことに対し、現時点よりもさらに「負担」を背負えるのだろうかと、不安やあきらめに似た感情を抱いてもおかしくはない。

わが国の少子化対策では、就業支援や、保育所の待機児童の解消、医療体制の整備といった、夫婦を取り巻く環境の整備が中心となっている。もちろん、それらは一定の効果を上げている。しかし、行政や企業は環境整備だけでなく、当事者自身の心身の状態や、「ヘトヘト」「大変」「負担」という声にも、もっと目を向けなければならない、ということを、この調査結果は我々に突きつけているのではないだろうか。

一方で、この「ヘトヘト」「大変」「負担」という声に向き合うべきなのは、行政や企業だけではない。個々人にも同様に、考え直す余地が大いにあると思うのだ。試しに、冒頭の一文をこう書き換えてみたらどうだろうか。

「お金を稼ぐモチベーションが上がる。充実した時間を享受できる。やりがいのある長期的な一大プロジェクトのリーダーになる。（子どもを抱っこすることで）ジムに行かなくても体力が向上する」

「それって何？」と、前のめりになる男性が格段に増えることだろう。育児には、多くの男性が、仕事や人生において求めているものが多分に含まれている、と私は思う。「子育ては大変ですか？」とたずねられれば、私だって「大変ですね」と答えることもあろう。ただ、やりがいがあって、おもしろい仕事で、微塵も「大変だ」と思わない仕事が、果たしてあるだろうか。この原稿を書き上げ、私は寄り道もせずに、大急ぎで家に帰り、一大プロジェクトのリーダーに変身するのである。あぁ、なんて充実した「大変さ」なのだろう。

撮影 / キッチンミノル

未妊レポート2013 ～子どもを持つことについての調査～

調査検討委員会

竹内正人　産科医／東峯婦人クリニック
河合蘭　出産ジャーナリスト／『卵子老化の真実』著者
白井千晶　早稲田大学非常勤講師／社会学
竹原健二　国立成育医療研究センター研究所研究員／疫学
後藤憲子　ベネッセ教育総合研究所　次世代育成研究室室長
持田聖子　ベネッセ教育総合研究所　次世代育成研究室研究員　調査事務局

※所属・肩書きは2014年1月時点のものです。

調査からみえること

6年ぶりに行った本調査では、前回調査時（2007年）に比べ、未婚女性、既婚女性ともに平均年齢が1歳近く上がっています。経年で見ると、既婚女性の中の子どもを持つ意向のある人については、子どもを「今すぐにでも持ちたい」という比率が上がっています。不妊への気がかりや、「卵子老化」という言葉の認知度は、女性の方が男性よりも高い傾向にありました。また、女性の半数近くがふだんの健康状態について「疲れている」と回答、約4人に1人が「月経に関するトラブル」を抱えています。妊娠に向けての具体的な取り組みとともに、まずはベースとなる健康な身体づくりが大切であると言えるでしょう。

子どものいる暮らしについてたずねると、「お金がかかる」という回答が男女ともに多く、金銭面でのサポートが妊娠・出産・育児支援策として強く期待されています。本調査で子どものいない30代の既婚女性12名に対して行った面接調査でも、「子どもはお金がかかる」というイメージが強く、経済的な点で子どもを持つことをためらっている様子がうかがわれました。一方、研究所で2011年に実施した「第2回妊娠出産子育て基本調査」では、乳幼児を持つ母親は、妊婦健診や子どもの医療費への助成について、充実していると評価しており、今回の回答とはギャップがあります。具体的な育児支援策は、妊娠、出産して当事者になってみないと得にくい情報なのかもしれません。

調査結果から、研究所としては、これから親になる世代に向けて、以下の2点が重要であると考えています。

◇さまざまな理由・背景により、晩婚化、晩産化が進み、子どもを持つ機会を逸したり、不妊治療等で苦労されている人たちが少なからず存在することを考えると、高校生や大学生など**人生の早い時期から、男女双方**に向けて、妊娠・出産に関する正確な情報を伝えることが必要であると考えています。これにより男女とも、ライフプランを考える上で、キャリアだけでなく、結婚や家族をつくることについても、**前もって、より具体的に考えることができる**のではないでしょうか。

◇今、子どもを持つことをためらっている人に向けては、**育児支援制度の情報を分かりやすく届けることで、情報不足による経済的な不安感を減らすことができる**のではないかと考えます。

◇ ご意見をお聞かせください。

この調査に関するご意見・ご感想を、ベネッセ教育総合研究所のウェブサイトで受け付けております。
http://www.berd.benesse.jp

◇ この調査レポートは、下記のURLよりダウンロードできます。

http://berd.benesse.jp/jisedai/research/detail1.php?id=3681

未妊レポート2013
～子どもを持つことについての調査～

発行日……2014年1月30日
発行人……岡田晴奈
編集人……谷山和成
発行所……株式会社ベネッセコーポレーション　ベネッセ教育総合研究所
東京都多摩市落合1－34
電話042-311-3390　受付時間10:00～17:00（12:00～13:00、土日、祝日を除く）
デザイン……デザインオフィスCAN　水口裕美子

© ベネッセ教育総合研究所／無断転載を禁じます

3STH09